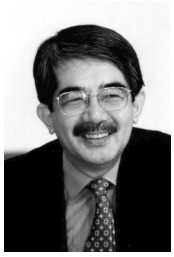
健康なアフリカ社会をめざす国際シンポジウム報告

Report of the International Symposium: Towards healthy society in Africa

大阪大学大学院　人間科学研究科　博士後期課程院生　水　元　　芳
大阪大学大学院　人間科学研究科　教授　医学博士　中　村　安　秀

Kaori MIZUMOTO
1966年1月生
現在，大阪大学人間科学研究科（在学中）
プライマリーヘルス管理学修士，栄養学
1886-1991 国内病院勤務（管理栄養士）
1992-1994 青年海外協力隊参加
1994-1995 JICA東海支部勤務
1996-1999 民間企業栄養相談室勤務
2000-2002 JICAミクロネシア事務所勤務
2003　タイ、マヒドン大学でPHCM修士号を取得
2004　JICAボツワナ事務所勤務
2005-2008 JICA南アフリカ事務所勤務
2007-　大阪大学人間科学研究科（博士課程後期）現在に至る
E-mail：kaorimizumoto40@hotmail.com



Yasuhide NAKAMURA
1952年2月生
東京大学医学部医学科卒（1977年）
現在，大阪大学大学院 人間科学研究科
ボランティア人間科学講座国際協力論，
教授，医学博士，国際保健医療学
TEL 06-6879-4033
FAX 06-6879-8064
E-mail：Yastisch@aol.com

野口英世アフリカ賞受賞ウェレ博士・国際シンポジウム

2009年7月13日（月）大阪大学中之島センターにおいて、大阪大学人間科学研究科と長崎大学国際健康開発研究科の共催により、第1回野口英世アフリカ賞を受賞されたミリアム・ウェレ博士を招いての国際シンポジウムが開催されました。シンポジウムは国際保健コンソーシアム、特定非営利活動法人HANDS、日本WHO協会、日本国際医療学会学生部会の後援をいただき、「健康なアフリカ社会をめざして（Towards healthy society in Africa）」をテーマとして、日本からのアフリカ協力報告、基調講演、パネル・ディスカッションといった構成で実施されました。シンポジウムは日本語と英語の同時通訳で行われ、平日の開催にもかかわらず、多くの方々にご参加いただくことができました。

国際社会全体がミレニアム開発目標の達成に向けて努力をしていますが、サブ・サハラ・アフリカ地域では依然として貧困、食料不足、HIV/エイズ、結核、マラリアなどの感染症、そして、高い乳幼児死亡率や妊産婦死亡率が深刻な人間の安全保障上の脅威となっており、ミレニアム開発目標（MDGs）の達成が危ぶまれています。日本では2008年、G8洞爺湖サミット、第4回アフリカ開発会議（TICAD IV）などが開催され、アフリカへの関心が高まっています。途上国での保健問題解決に取り組む上では、コミュニティの参画を進めながら地域に根ざした対策を進めることが重要です。ミリアム・ウェレ博士は、長年にわたりコミュニティとともに、子ども、女性、HIV/エイズの分野での諸問題に向かい合い、アフリカ大陸の希望のシンボルとして活躍されてきました。現在、ケニア国家エイズ対策委員会（NACC）委員長としての業務に携わる一方で、ケニアの人々の生活向上をめざした青少年育成活動を支援するウジマ財団執行理事としてもまた精力的に活動されています。こうした長年の功績が評価され、日本政府が野口英世没後80年を記念して2007年に創設した野口英世アフリカ賞の医療活動部門第1回目の受賞が決まり、2008年5月に横浜で開催されたTICAD IVの初日にその授与式が行われました。ウェレ博士を迎えた大阪での国際シンポジウムでは参加者のみなさまから、アフリカの健康や保健医療に関する理解を深めるとてもよい機会であったとの声を多く聞くことができました。

シンポジウム・プログラム

14：00　開会の挨拶　中村安秀（大阪大学）

14：10 - 14：40　第1部
司会：神谷保彦（長崎大学）

● 日本からのアフリカ協力の報告
「コミュニティでの妊産婦ケアの改善をめざして」
浅野円香（特定非営利活動法人 HANDS）
「ボツワナでのコミュニティ栄養調査」
水元芳（大阪大学大学院生）

● 基調講演：ミリアム・ウェレ博士（ケニア）
「健康なアフリカ社会をめざして」

（休憩 10 分）

15：50 - 16：30　第 2 部
司会：中村安秀（大阪大学）

● パネル・ディスカッション
「健康で幸せなアフリカ社会の実現のための国際協力」

16：30　閉会の挨拶　青木克己（長崎大学）

1．日本からのアフリカ協力の報告

最初に、「コミュニティでの妊産婦ケアの改善をめざして」と題して、特定非営利活動法人 HANDS の浅野円香さんによる「ケニア西部地域保健医療サービス向上プロジェクト（2005-08 年）」での活動が紹介されました（国際協力機構の提案型技術協力プロジェクトとして実施）。プロジェクトの中で HANDS が重要視したのは、ヘルスセンターとコミュニティの連携強化でした。HANDS は、「パートナーズ・ワークショップ」という、住民とヘルスセンタースタッフの合同研修の実施を提案しました。助産師などの保健スタッフと住民に対する研修はそれまで別々に行われていました。パートナーズ・ワークショップでは、サービス提供者（保健スタッフ）と受益者（住民）が寝食をともにしながら同時に地域の妊産婦ケアに関する問題を共有することができ、互いの役割に対する理解が深まって活発な意見交換が行われました。プロジェクト終了時には住民によるヘルスセンターの利用率が高まり、保健サービスへの満足度も向上しました。プロジェクトではヘルスセンターの整備も行い、整備計画の段階から積極的にコミュニティの巻き込みを図りました。住民は、「ここは自分たちのセンター、家族のためによくしていきたい」と考えるようになり、住民の意識改革がセンターの活性化、そしてサービス向上へつながったと考えられています。医療者とコミュニティとの協働によって地域での保健医療サービスが向上した貴重なプロジェクトの活動報告でした。

続いて、「ボツワナでのコミュニティ栄養調査」と題して、水元が現在取り組んでいる博士論文研究のため 2009 年の 2 月から 5 月にかけてボツワナで行った調査についての報告を行いました。多くの途上国で、食習慣、身体活動習慣を含むライフスタイルは変化しており、HIV/ エイズをはじめとする感染症対策が喫緊の課題であるとされるボツワナにおいても、都市化や産業化に伴うライフスタイルの変化に起因して増加する慢性疾患への対策は重要な保健課題の一つとされています。また、近年の途上国では、1 つの国の中で低栄養と過剰栄養が同時観察され、個人レベルでは過剰エネルギー摂取による肥満と微量栄養素の欠乏が同時に見られます。これらはいずれも「栄養の二重負荷」と呼ばれ、グローバル化や都市化と密接に関連した問題だとされていますが、ボツワナの都市部と地方部における栄養問題の差異は明らかになっていません。ボツワナの都市部と地方部それぞれに住む人々の栄養状態（BMI）と食事摂取状況を把握し、調査対象者の食事に影響を与えると予測される各要因との関連性を明らかにすることを研究目的とした横断的調査を実施しました。ボツワナ中東部に位置するセントラル・ディストリクトを訪問し、都市部に住む 200 名の女性（25 − 54 歳）、地方部に住む同年齢群 200 名の女性、計 400 名を対象として身長・体重測定、食事と栄養に関しての半構造式質問票を用いたインタビュー、フォーカスグループ・ディスカッション（FGD）、および参与観察を行いました。通常あまり表に出てこない調査の様子を、研究の概要と共に紹介させていただきました。

2．ウェレ博士基調講演「健康なアフリカ社会をめざして」

ウェレ博士の基調講演では冒頭、野口英世アフ

リカ賞受賞への感謝の気持ちと共に、野口英世アフリカ賞とTICADの結びつきが重要であると述べられました。長年にわたる社会政情不安定を背景にして貧困からなかなか抜け出せないアフリカは、かつてエコノミスト誌で「希望のない大陸」と呼ばれ、アフリカの人々を落胆させました。一方、TICAD Ⅳのテーマは「元気なアフリカをめざして」であり、このテーマは、アフリカの人々が「それを目指したい、実現したい」と前向きに考えることを力付けました。アフリカに力を与えてくれるTICADで授賞式が行われる野口英世アフリカ賞は、アフリカの保健分野で働く人にも力をくれるのだということです。

長崎大学とケニアの関係にも触れられ、2009年５月にナイロビで開催された野口英世アフリカ賞受賞祝賀式典には長崎大学から青木克己教授、神谷保彦教授も参加され、そこでは、科学の知識を人々の生活の向上を目指した取り組みに活用するための重要なかけ橋は「人」であると話されました。

アフリカの保健問題は山積しており、MDGsの達成が危ぶまれています。アフリカの何が悪くてこんなにも問題解決が困難であるのかを考えた時、それは決してその大陸に住む人々の肌の色が黒いことが原因ではなく、500年の長きに渡って続いた奴隷貿易制度や、多くのアフリカの国々で独立後に滞った国内資金流通などの歴史的問題があると考えられています。歴史と現在の経済状況から問題の本質を分析することは保健問題への取り組みにとっても重要なことだとウェレ博士は強調されました。

近年、途上国における保健問題への対応には保健システムの強化が重要であることに注目が集まっています。保健システムの中で重要なコンポーネントの１つである保健人材の育成を目指して、2005年にはグローバル・ヘルス保健人材同盟（Global Health Workforce Alliance: GHWA）が設立されました。保健システムの概念図は逆ピラミッド型をしており、実際の保健問題が存在するコミュニティの役割の重要性が強調されています。もちろん保健スタッフの教育も強化され、以前よく見られた軍隊のような命令口調で患者に対応するような光景は改善されてきました。HANDSがケニアで実施されたパートナーズ・ワークショップのような、保健サービス提供側とコミュニティの連携強化への取り組みが実を結んでいます。

ミリアム･ウェレ博士

ウェレ博士は母子手帳についても触れられ、母親参加型の母子保健プログラム強化はまさにコミュニティ・アプローチであり、アジアで広がっている母子手帳をアフリカにおいても普及させることの必要性を訴えられました。また、地域社会のエンパワーメントが不可欠な要素である人間の安全保障アプローチは、MDGsの第４目標（乳幼児死亡率の削減）、および第５目標（妊産婦の健康の改善）を達成させることも夢ではないと考えられています。ウェレ博士が執行理事を務められているウジマ財団の若者支援プログラムは、学校に通えない、仕事がない、そして自己実現ができず不満や怒りが鬱積した、ともすれば社会の危険因子とさえ考えられる若者たちを、ケニアの人々の生活向上を目指した取り組みに大きな役割が担えるための研修や活動機会の提供を行っています。研修センターと活動の内容が紹介され、ウェレ博士は、若者こそが地域の発展のために大きなカギを握っていると話を結ばれました。

３．パネル・ディスカッション「健康で幸せなアフリカ社会の実現のための国際協力」

パネル・ディスカッションではフロアからパネラーに多くの質問が寄せられました。2009年２月イタリアでのG7金融サミットを受けて、アフリカ支援のための国際支援をどのように引き込ん

司会者：中村安秀と神谷保彦教授（右）

ウェレ博士とベトナムで母子手帳普及活動を行っている
NGO 事務局長の板東あけみさん

でいくのか、アフリカの食に対する地球温暖化の影響、また、コミュニティに根ざした具体的な活動例などについて活発な意見交換が行われました。長崎大学の青木克己教授は、途上国における熱帯医学分野での仕事に携われた 30 年を振り返り、先進国で効果を発揮した医療ツール（薬やワクチン等）がアフリカではその効果を同様に見ることのできない理由は、政策、人材、インフラ、そして住民参加にあるのだと分析されました。今後必要なアプローチは、疾病の生態学に新しい発想を持つこと、そして保健医療ツールが効果的に作用するために社会医学的研究の積極的導入の２点であると、コミュニティを巻き込んで保健プログラムへの住民参加を促すことの重要性を説かれました。日本ではまだ社会医学的研究の重要性に対する認識が低いともいえる中、野口英世アフリカ賞では医学研究部門のみならず、コミュニティに根ざした医療活動部門においても賞が設立されていることは大変画期的なことなのだと結ばれました。シンポジウムの最後に、大阪大学中村安秀から、シンポジムに参加されている多彩なバックグランドをもつ方々の協働こそが、科学の知識をアフリカの人々の生活の向上を目指した取り組みに活用するための「かけ橋」であると訴えさせていただきました。

パネル・ディスカッションのパネラー：
（左から水元、長崎大学青木克己教授、ウェレ博士、
HANDS 浅野円香さん）

熱心に聞き入るシンポジム参加者